マゼンタのともしび

さろめ

五月のカルデア。
エリザベートとネロが、言葉を話すことができない少女の行先を探す話。
▼ＣＣＣイベに際して書いたものです。
▼完結していますが、本文が長めのため二度の投稿に分けさせていただくことにしました。
※ｐｉｘｉｖへマルチ投稿しています。

目次

第1話 1
第2話 37

第1話

カルデアに五月が訪れていた。

といってもどこかの小さな島国のように、美しい四季など望むべくもない。標高云千メートルを超えるその地に吹き抜けるのは、やはりというべきか、皐月の風はおろか、いつもの通り柔らかな氷を含まない日はないという有様だった。

そんなあらゆる現代科学で護られなければやっていかれない殻の内側。普段と何も変わらない様子の食堂の片隅に、エリザベート・バートリーはおかしなものを見つけていた。

お昼のパスタを口に運ぼうとしていたフォークが思わず止まる。二度見、三度見してから、食事どころではなくなったのか皿の上に食器を置いてしまった。はしたなくも席を立ち、その傍まで行き、話しかけた。

「アナタ誰？　いつの間に、どこから来たの？」

彼女の近づいた二人席には、ぽつんと一人の少女が腰かけていた。

昨日までカルデアの中で一度も見かけたことのなかった顔だ。

こげ茶色の大きな瞳に、柔らかそうな栗色の長い髪。彼女は問いには答えず、エリザベートの翡翠色の瞳を真っ直ぐ見つめたまま黙っている。緩く結ばれた口元と、動きのない表情とが物静かな印象に拍車をかけていた。歳の頃は、立香と同じくらいだろうか。

「ねえったら。私（アタシ）とお話するのが嫌ってワケ？　それともお喋りができないの？　できないのだったらそうと言ってみなさいよ」

苛立ちからか無茶な注文をつけるエリザベート。けれど言われた方の彼女は、それにこくりと頷いてみせた。

「……本当に喋れないの？」

こくこく、と慌てたように彼女は頷く。

「ふうん、そう……」

もしや場面緘黙症というやつだろうか。どうしたものか、とエリザベートは少し面倒に思う。

というか、人間などあのマスター以外誰がいようと構わないのに、見慣れない顔

だからといって、何故話しかけてしまったのか。外界との連絡が取れるようになった今、この先、知らない顔が増える事など珍しくなくなるはずなのに。

しかし、彼女の容姿を眺めながらふとその答えに気づく。

「――ああ」

なんのことはない簡単な理由。それは彼女が『少女』だから。

人知れず、エリザベートは少しの倦怠を抱く。僅かな自己嫌悪から渋面をつくる。そういえば立香とマシュの他に、これまで、今を生きる人間で少女の姿をしたものはここにいなかった気がする。いたのかもしれないが、自分は出会ったことがない。

栗色の髪の少女はそんなエリザベートの感情を僅かでも感じ取ったのか、どうしたの、とでも問いかけるように首を傾げた。

「……いいえ、なんでもないの。で、アンタ、兎にも角にも迷子なのよね？　どこに行ったら良いのかもわからないんでしょう？」

しかし少女は首をふるふると横に振る。

「なら、行くべきところに行ったらどうなの。道案内もいらないでしょう？」

けれどやはり首は横に振られる。

答えが矛盾している。何がしたいのだこの人間は……とエリザベートは流石に訝った。意志疎通がイエスオアノーでしか図れないことがとても疲れる。

とにかく、自分一人ではどうしようもなさそうだと考えた。彼女は少女の手を取り、二人して食堂の様子をずっと眺めていたであろう、厨房にいるエミヤの所へとぱたぱたと駆けて行った。

案の定というべきか、エプロン姿の彼は今日もそこで鍋を振るっていた。けれど昼休憩の時間ももう終わりに差し掛かっていて、忙しさのピークは過ぎている。なんとか話しかけられそうな頃合いだ。ステンレスのカウンターから身を乗り出して、エリザベートは厨房の喧噪に負けないように声を張った。

「ちょっと、ねえ！」

名指しをしないのに、一度だけの声掛けで彼は振り返ってくれた——というか、エリザベートの方を一瞥すると、何かね、と訊き返すことだけをし、あくまで作業の優先順は料理第一らしく鍋から目を離さなかった。

「この子、迷子みたいなのだけど。アナタ、ずっと調理場にいたんでしょう？

何か知らない？」

「迷子……？」

エミヤはエリザベートの言い方に首を捻る。

何しろ心当たりが全くない。確かにカルデアに子供は幾人かいるが、彼女が改まってこの子と言ったことに何処か違和感を覚えた。外部の人間が来るなどという話も、ダ・ヴィンチや他の職員から聞いた覚えはない。

少し待っていたまえと返し、作りかけの回鍋肉を手早く仕上げる。盛り付け用のバットに滑らかにそれを足してから、彼は改めてエリザベートに向き直った。

「しかし、まさか君が誰かの世話を焼こうとは」

手を拭きながら彼は信じられないといった顔になる。エリザベートは、余計な一言はいいからさっさと教えなさいよ、と憤慨した。

「それで、その迷子というのは何処にいるのかね」

「はあ？　アナタ本当に耄碌したの？　ここにいるじゃないの。髪が長くてひたすら地味な感じのニンゲンが」

エリザベートはぽん、と少女の両肩に手を置く。

エミヤの顔が、怪訝な表情のまま固まった。
「――私には、そこに誰もいないように見えるのだが」
「へ？」

◆

「……」
エリザベートは黙って少女の手を引いて廊下を歩く。
どういうことなのだろう、と頭の中で状況を整理する。
自分には見えてエミヤには見えない。食堂にいた他の人間にも少し聞いてみたがそれは同じで、思い返せば誰もこの少女に話しかけようとする者はいなかった。あまりに何人にも訊いて騒いでは頭の心配をされてしまう気がして、沢山の人には訊けなかった。
やりきれなくなって少女の手をとって引っ張って来てしまったのはいいが、何処に行ったら良いのだろうとふと思う。
「その、なに……アンタってばもしかしてオバケ？」
少女は少し目を伏せて首を振る。お化けという言葉の意味はわかるらしい。

「でもきっと……私自身がオバケだったら、そうじゃない！　って叫ぶわよね……」

もはや彼女の方は向かず、独り言に近い言葉を呟いた。少女は手を引かれたまま心配げに彼女の後姿を見ている。

「うーーーーん……」

お化けって果たしてこんな感じのものだったろうか？　とエリザベートは首を捻る。

「足はあるし触れるしあたたかいし……」

絶対におかしい。

夢を疑って隠れて頬をつねってみるも、効果はない。

と、彼女は何かに気づき、つと足を止める。少女はエリザベートの背中にぶつかりそうになったが、ぎりぎりの所でそれを堪えた。

立ち止まったそこは、清姫の部屋のドアの前。

いつの間に、なんでこんな所に、と彼女は思う。

けれどそれは自明のこと。

何故かって、この部屋にいる彼女なら、真正面から本当のことを言ってくれるこ

と請け合いだから。だから何処へ行こうかと悩みながらも、無意識のうちにこの部屋を目指してしまっていた。

ダ・ヴィンチ、それにマリーや立香……彼女たちではこの少女を自分（エリザベート）の見ている幻覚と断じた後で、何か優しい言葉をかけられて絆されて終わるかもしれない、そんな気がしていた。そんな風になってしまったら、自分もそうだと思い込んでしまい、結局少女の行き場がなくなりそうな気がして恐ろしかった。

ただし――こいつに意見を求めるということは。

「すっっっごい、馬鹿にされそう……」

「どなたがどなたを――馬鹿にするんです？」

「!?」

声なき声を上げて飛び退る。片手を掴まれたまま振り回されて、物言わぬ少女も転びかけたがなんとか体勢を立て直した。

「このスト……、へ……」

「はい？」

あまりに驚かされて、エリザベートは怒りと共に語彙を失う。ただ喧嘩をしに来

た訳ではないという当初の目的がセーフティになってくれ、聞くに堪えない悪態をつくのをギリギリで食い止めることが出来た。

「……」

「どうしたのです？　何か用があってわたくしの所に来たのではないのですか。でなければ、わたくし、色々やって疲れてしまったので、もう部屋に戻って休みたいのですけれど」

「え、ええ……」

落ち着け、と自分に言い聞かせて深呼吸をする。なじったり責めたくなる衝動を無理に抑え込んだ。何故こんなに自分は真剣なのだろうと、一瞬だけ疑問に思う。普段ならここでひと悶着あってもおかしくはない……というか確実にそうなっていただろうに。

ともかくと問いかける。ここまで少女の存在に清姫が反応しないことで、半ばの諦めはあったけれど。

「アンタ、今ここに、私以外の誰かがいるように見える？」

清姫は少しぎょっとした様子で、袖で口元を隠す。

淡い望みのためか。その仕草が何かに目を凝らしているように見え、エリザベートは一瞬だけ期待をしたが、

「……誰もおりませんね」

ただ自分の質問に引かれただけだとその答え方でわかった。

「いよいよ頭痛が進んでおかしくなったのですか？　本当にそこにいる霊なら霊で、わたくしたちにはそのまま視える筈ですのに」

「あっ……」

確かにそうだ、とエリザベートは気づく。自分たちはサーヴァントだった。人間には見えないものも普通に見えるはず。程度の差はあるだろうが、自分は霊視にそんなに長けた能力ではなかったはずなのに。

もしかして、新しい能力に開眼してしまったとでもいうのか？

でも、こんな少女一人が視えるだけで、あとは変わったことは何もない。

だとしたら、この少女は自分の願望か理想像か何かで、そんな架空の姿が投影されているだけ、とか。

いや、これが……こんな地味な女の子の姿が？

いくら自分が惚れっぽいとはいえ、こんな初対面の――

「うん……？」

エリザベートは小さな違和感を覚え、蹲って頭を抱えたまま少女の方を見上げる。けれど、その閃きのような思考の走りは、清姫の言葉に遮られた。

「さっきから心の声がダダ漏れでしてよ。まあ、いつも通りですけれども。――ところで貴女」

「なによ」

「何かとっても大事なことをお忘れではありません？」

「大事なことって……」

聞き返すも、わからなければそれで構いません、と呟き、清姫は上品に口元を袖で隠して欠伸などすると、それきり自分の部屋に引っ込んでしまった。

今度は清姫の部屋とは全然違う方、明確な行先へとエリザベートは脚を向かわせていた。

少女はまた静かに相手の顔を伺う。それに気づき、彼女は少し眉根を寄せた。
「いったい何を心配がっているの。すぐなんとかなるのだから、アンタは黙ってついてきたら良いのよ」
尚も少女が彼女から視線を離さないでいると、
「あん？　なんとかって、どうするのか――ですって？」
アイコンタクトで多少の疎通はできるらしい。少女はこくりと頷く。
「そんなの決まっているじゃない。ヘビ女が言っていたでしょ。霊ならば大抵のサーヴァントなら見えるって。なら、アンタを見えているか、見えていないかを分けるのは認識しようとする側の能力の差なんでしょうよ」
少女はわからない、という風に首を傾げる。
「だーかーらー、私に声が聞こえないなら、誰か他のひとに声を聴いて貰えば良いでしょってこと！　私は、アンタが視えてそこにいることがわかる。そこにいるということさえ教えれば、声を拾ってくれるひともいるかもしれないでしょ。それが認識能力の差ってこと。役割分担で協力プレイ！　そういうこと。オーケー？」
こげ茶色の瞳を見開き、さも驚いたような顔をされる。

「……何か、すっごく馬鹿にされてる感じしかしないわね」

廊下ですれ違っていくカルデアの職員や、サーヴァントたちの殆どがエリザベートの方を振り返る。ひとり相撲を繰り広げているように見えているのだろうから当然だ、と彼女は割り切ったことを思うも、不思議とそれが苦ではなかった。

そもそもこの少女の世話を焼こうとしたことといい、清姫と喧嘩にならなかったことといい――それに元をただすなら少女の存在自体がそうなのだが、今日は不思議なことの連続だ、と彼女は思う。

何だか、自分にとってとても大切なものの価値を誰にも判ってもらえないような。上手く言えないが、そんなもどかしい思いがする。

もしかしたら、裸の王様はこんな気持ちだったのだろうか。連鎖的に自分が裸になった所を思い描き、彼女は少しだけ赤面する。

（いえ、というか――大切ってなにがかしら？）

今の自分の躁鬱は激しいものだろうか、とエリザベートは自問する。

確かめてみるがそうでもない。そんな客観的な視点を持てるあたり、今日の心はかなり落ち着いていた。　なら、こんな浮かれたことをつらつらと考えるのは何故

なのだろう。

浮かれている。確かにそんな風だと改めて思う。何故そのようになっているのかは、やはり全く見当もつかないけれど。

「っと、確かこの部屋だったわね」

一も二もなく無造作に速攻でチャイムを押す。それから彼女はドアの前で叫んだ。

「出て来なさい、セイバー！　いるんでしょう！」

道場破りよろしく堂々の仁王立ちで待ち構える。少女は突然あがった叫び声のためか、気が気ではないといった不安げな様子でエリザベート見上げている。

けれど十秒、三十秒してもセイバー、もといネロ・クラウディウスは姿を現さない。

「……」

早速堪忍袋の緒が切れたエリザベートの眼が据わる。そして神経質そうに黙りこくったまま、壊さんばかりの勢いで容赦なくチャイムのボタンを連打した。

防音の壁を隔ててもわかる。出鱈目に耳障りなチャイム音が部屋の中で連続した

後、ドタドタという足音と共にやっとドアが開いた。
「あー、うるさいっ!!　何事か！　やっとひとが色々を終えてまどろみかけたところで！」
　ドアの間から美しい金色の髪をした少女がまろび出るのと同時に、廊下にぶわりとマジョラムの香りが広がった。
「なにこの……アロマじゃないの!?　アナタ、こんなものいつの間に使ってたのよ」
「これか？　ふっふっふ、冬の間にマスターにゴネ通し、つい先日半年分を運び入れてもらったのだ」
「う、うらやま……じゃなくて、なんたる物質主義なのかしら。落ちたものねセイバー、それしきの品物、独力で用意できないだなんて」
「馬鹿者、ランサー。それしき、ではないのだ！　このような白銀に包まれた世界の果てであるぞ。そこに心安らぐこの香り。それも魔術で製造したりレイシフトで採って来た代物ではなく、人理焼却を乗り越えた無辜の民の営みが作り出したもの。これがどれほどの意味をもつものなのか、わからぬ貴様ではあるまい」

この際ゴネたどうだという話は置いておく。こんな力説をされては由来はともかくやたらと羨ましくなってしまう。しかも自分がワガママを言ってもあんまり聞き入れない癖に、ネロの言うことは聞き届けたというのか、あのマスターは――！

「ぐぬぬ……」

ほぞを噛むエリザベート。そうして何も言い返せなくなっていると、ふと思いついたようにネロは話題を切り替えた。もとい、話を本筋に戻した。

「それはそうとこんな昼下がりにどうしたのだ。律儀にも呼び鈴を鳴らしたということは、闇討ちをしに来た訳でもあるまいに」

「誰がいつそんな汚いこと――ああ、ええ。そう、ちょっと、訪ねたいことがあるのだけど」

「前口上もなしとは直截よな。よほど切羽詰まっているとみえる。だが丁度良いぞ、申してみよ。今の余はとある雑務のためやたらめったら疲れておる所。もはやちょっとした塩対応でしか貴様の期待に応えられぬほどだ」

本当にどこかで労働をしてきたようで、はあと肩に手をやりながら溜息をつくネロ。

「それは今日は構わないけれど。ねえセイバー、アナタ、私の隣に誰かがいるように見えて？」
「どういう意味だ？」
ああ……とエリザベートは思う。もしかしたら彼女ならと思ったのだが。それでも一縷の望みを抱いて答える。
「笑わないで聞いてくれる？」
「うん？　何だ、急にいじらしく」
「い、いじらしくなんて――」
ネロは彼女の怒り顔を慈しむかのように微笑む。
「よい、何を言われても笑わぬぞ。とにかく申してみよ」
「なら……。その、今、私にはここに人間が一人いるように見えているの」
「……」
ネロは真剣な面持ちでエリザベートの指さした場所にじっと目を凝らす。意識して霊視の眼を開いてみる。けれどやはり、
「うむ、そこには誰もおらぬな」

「……そう」

同じ頭痛持ちの彼女ならと思ったのだが。エリザベートはがっかりして目を伏せる。彼女だけに視える少女も、周囲の状況を察しているのか繋いだ手はそのままに肩を落とした。

「だが、そこには余が視えないだけで誰かがおるのだな？」

エリザベートは残念そうな表情を変えないまま頷く。

「それで、その者の目的はなんなのだ」

「それがわからないのよ。どうも……喋ることが出来ないみたいなの」

しどろもどろになりながらエリザベートはそう答える。自分一人の妄想かもしれないことを口にしていて恥ずかしい気持ちと、少女の境遇を伝えたいという積極性がないまぜになってとても困る。

「そやつはどんな見目をしている？　どのような振る舞いをする者だ？」

まさかの羞恥プレイであった。エリザベートは流石に言い淀む。

けれど、ネロの眼差しに全く揶揄が含まれていないことにふと気づく。それに気圧されたのか、それとも安心させられたのか……少女の今の様子を、素直に伝える

ことにした。

「ふむ、成る程な……」

教えられた彼女は十秒も何か考え込んでいたが、やがて、

「よし、あいわかった。ならば余も、そやつの目的を達するために協力をしようではないか」

「ええ……？」

「素直に喜ばぬか、余が申し出ているのだぞ」

「でも、一体どうするつもりなのよ。アナタ自身がこれの声を聴ける訳ではないでしょうに」

「うむ、全く聞こえぬ。今もその少女とやらが何処にいるかすらわからぬ。だがな、貴様はまだそやつのためにしておらぬことがあるであろ？　余はそれを手伝おうと思う」

「……？」

「なに、簡単なこと。カルデア中の人間に訊いて回ればよいのだ」

「――それは」

それは、辛い。そんな言葉が喉まで出かかった。しかし本当にそれを口にしたら、ネロの申し出を断るのと同じになる気がして言葉を飲み込む。

「どうするのだ。やらぬのか？　素晴らしいではないか。視えると騙すも、視えると騙されるのも悪くはない。その者が本当に存在しそれが証明されるなら、もっと楽しいではないか。余はむしろ、それがどうやって成るのかが見たい」

先刻自己申告していた疲れとやらは何処へやら。今にも先に立って歩き出しそうな様子で、ネロはエリザベートに向かって首を傾げる。

どうやら、『恥なら一緒にかぶってやる』とか、『お前の言うことならば信じよう』とかそういう崇高（うそっぽい）なフレンドシップから誘われているのではないらしい。

『ただ楽しそうだから付き合うのだぞ』。

口にされこそしないが。不思議そうにこちらを見やるネロのその顔に、思いっきりそう書いてあるのがわかる。

「アンタって……ホント、全っ然私よりわがままよね……」

エリザベートは呆れ果てて溜息をつく。

「ようし、決まりだな」
ネロは踵を返して歩き出す。エリザベートは負けじとその隣に並ぶ。
そんな二人の背中を眺め、栗色の髪の少女は人知れず淡く微笑んだ。

◆

三人の聞き込みは夕方を過ぎ夜まで行われた。
しかし収穫というものはなんと――何もなし。皆無であった。誰も少女の姿や声を確認できないことはおろか、ある女性スタッフの所を訪れた際には、『英霊の方も見目相応に遊んだりすることもあるんですね』なんて微笑ましげに見守られてしまう始末。
振り出しの食堂に戻り、ネロはぐったりとして四人席のテーブルに突っ伏した。
「ま、まさかの誰もわからん事態とは……」
エリザベートも再び運ばれてきた紅茶に手をつけることもせず、俯き気味に目を伏せている。
「……もういいわよ、セイバー。後は私一人でやるから」
この埋め合わせは今度してあげる、と呟く。心が頑なになっていくのがわかる。

これでは、やはり自分の認識が普通の人間とは違うということがわかっただけだ。妄想癖、虚言癖。そういうものを支えるのは、本来誰にも見えないこうした幻影なのかもしれないなどとエリザベートは考察をする。いや、既に過去、そんなものは腐るほど見て来た気もする。

ただ不思議と、お前がいることが悪いのだと、この幻影の少女の存在を責める気にはならない。今も、気落ちしながらも、明日からまた別の方法でこの子の処遇をなんとかしてやらなければと頭の隅で考えている自分がいた。散々に振り回されているというのに、こうまでしてあげようと思うのは何故なのだろう。おかしな話だと思いながら少女の方を横目で盗み見、紅茶を啜る。

すると、向かいのネロが何やら唸り声を上げた。

「むうう」

「なによ」

「貴様なぜ、そんなに落ち着いている？」

「はあ？」

「いつもなら、もう癇癪を起しているところではないか。これだけ成果が出ていな

ければ尚更であろう」

エリザベートはどういう意味かしら、とでも言うように小首をかしげる。

「まあ……そう……かしら。でもそういうアナタだって、『飽きた』って言って部屋に帰っている頃合いじゃなくて？」

普通だったら。

そう口にしてから、エリザベートとネロは同時に『普通ってなんだろう』と首を捻った。

荒野にたむろするアンデッドと対峙したことがある。

冥界で馬鹿でかいゴーストを退けたことがある。

影のようなサーヴァントのなりぞこないを嫌というほど見て来た。

そんな風にこんな幽霊沙汰は今までにも沢山あった。ならば、この幻の少女が幽霊（？）だから特別であるという訳ではないらしい。

ただ、彼女のことをどうしても無視できない——捨て置けない。

そんなことを、テレパシーを使ったみたいに二人して思う。

『特別』ではないのだ。だから、この気持ちは瞬間的に燃えようとする刹那的なや

る気と違うらしい。

日常的に、あるいは、前に一度だけ。

経験したことがあるような。

「「うーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん……」」

同時に頭を抱えてしまう。

二人の脇にいる少女はそれをとりなすことも出来ず、かといっておろおろするでもなく、仕方がなさそうに微笑んでいる。

「お困りかな、お嬢様がた」

二人が顔を上げると、そこに微笑みながら立っていたのは花の魔術師……マーリンだった。

いつの間に現れたのかとエリザベートは思う。実際にそう訊こうとしたが、相席良いかなと先手を打たれ、疑問を飲み込まされてしまった。

結局二人がOKを出してもいないのに、マーリンは少女の向かい側、エリザベートの隣に腰を下ろした。

「なんだ貴様、笑いにきたのか？」

挨拶すらなくやや剣呑にネロが問う。自分と違い、彼女の姿が見える訳でもなくここまで付き合ってくれたのだ、無理もないなとエリザベートは思う。

「まさか。ただのしがないボランティアだよ。何やらあちこち訊いて回っている子たちがいると聞いてね。つまり、きみたちの草の根活動の賜物がいまここに座っているこの私、というワケなのさ」

（良い匂い……）

エリザベートは彼の横顔を見ながら関係のないことを思う。一緒に戦ったことは何度かあるがあまり喋ったこともなく、そんな今更の感想を抱いてしまっていた。

長いまつ毛、ふわふわの髪。柔和なくせに感情の読み取れない被造物じみた貌。改めて不思議な雰囲気だ、等とぼんやり思い始めた頃、そんな視線に気づかれたのか、彼は彼女の方を横目に見、意地悪げに少しだけ微笑んだ。慌てて目を逸らす。

その様子を伺っていたネロはますますむすくれた。

「貴様何を知っているのだ。カウンセリングなら、こちらは敢えて他を当たりたいぞ」

「なに、助けてあげたいと思っただけさ」

「答えになっておらぬ」

「何を知っているのかと訊かれても、何も知らないと答える他ないさ。何しろ、まだ何も君たちから事情を聞けていないんだから」

「……」

エリザベートは僅か逡巡する。あまり面識がない以上に、この男からは得体の知れない感じがする。

ただ……と少女の方を見る。物に干渉することはできぬようで、頼んであげたカフェオレの嵩は変わらないまま。同じように、聞き込みが手詰まりなのは確かなことだ、と思い直す。

けれど今までの数時間の経験が心に半分だけ蓋をした。

「どうせ、アンタも視えないんでしょう？」

「そこに、コーヒーがおいてあるよね」

マーリンは嘘っぽく微笑む。

「けど僕には視えないなあ、その席にいるんだろうけど、全然わからない」

「ほら、アンタでも視えないということは、そういうことでしょう。私のアタマが

おかしいってだけ。セイバーはそんな私の妄言に付き合ってくれたの。わかる？」
「うん、わかるよ。でも自暴自棄になるのはまだ早いさ。何故ってエリザベート、きみ、もう自分で答えがわかっているじゃないか」
「はあ？」
「きみの頭がおかしいってところだよ」
「……」
堪忍袋の緒が切れる音がネロにも聞こえた。エリザベートは拳を握ってマーリンに掴みかかったが、彼はちがうちがう、と弁明した。
「なーにが違うのだ」
エリザベートの蛮行を止めようとするでもなく、呆れたようにネロは訊く。いつの間にか召喚された彼女の殺人マイクスタンドをぎりぎりの所で押し返しながらマーリンは答える。
「別段、頭がおかしくなったと言いたいんじゃないんだ。だってそれは元から――いや、そうじゃなく！　エリザベートだけが視えているものならば、彼女の脳でしか認識できないことだろう。つまり、彼女の経験と記憶にあるものを元に、何か

の要因で生きたものに見えているだけなのでは、と私は思ったんだ」

彼にしてはやたら早口の説明にネロはほう、と僅かにテーブルから身を起こす。

「一理あるな。それならばランサーにしか視えぬ理由には説明がつく。――しかしな、急にそうなった理由はなんなのだ？　昨日まではそやつの姿など視えなかったのではなかったか、ランサー」

エリザベートは鮮血魔嬢の形相で槍の柄をマーリンの方に押し込みながらもえ、と返す。

「そら見たことか。それを説明せぬ限り、貴様の言っていることは結局、ランサーが幻覚を見ていると言ったのと同じに過ぎぬ」

マーリンはのらりくらりとエリザベートの攻撃――というか殺意のこもったじゃれつき――をかわしながら話す。

「それは、ネロ、きみと……エリザベートで、持ってるものの、違いを、考えれば……わかることだ。――ほら、落ちたよ」

言いつつマーリンが拾い上げたのは、ちっぽけな一枚のカード。

エリザベートは自分のスカートのポケットを抑えて手を止める。暴れている内

に、そこにある筈のものを落としてしまっていた。
それは、魔術回路めいた紋様の描かれた金属製のもの。
マーリンはその表を返す。そこに刻みつけられた文字曰く――
≪Another Ending（もう一つの結末）≫
「概念礼装だと？」
ネロはテーブルから身を乗り出した。
「それがランサーの見ているものに影響を与えたというのか」
マーリンは何処か満足げに頷く。
「うん、そういうこと。結局、礼装は霊基に影響を与えるものだからね。簡単な帰結だろう？」
でも、とエリザベートは食い下がる。
「どうしてその礼装だけが？　というか、その礼装……私が子ジカに付けてもらったのと、違う……」
「おっと、色んなことがわかってきたねえ」
困ったように微笑む花の魔術師。

「まあ、その礼装を誰がすり替えたのかは、もはや現在視の私にはわからないことだ。ただ、その礼装が取り換えられた時にエリザベートの認識が変わったのは確かなんだろうね。そして礼装に残っている魔力の残り香。そんな僅かな量しか残されていないということは……きっと、その子は声が出ないのではなく」

マーリンはそこで何故か言い淀む。

ネロが首をひねるのをよそに、エリザベートは直感的に、彼の言いたいことがわかった。

改めて、少女の貌を彼女は見る。

少女はやはり、さっきまでと同じように真っ直ぐにエリザベートを見返す。

あるいは、今実際に彼女の姿を視ることが出来るからわかる。

固いというにもおこがましいような強い決意、覚悟、どちらでもない……そう、一過性のエネルギーの発露、その場しのぎの火事場の馬鹿力としてではない、とてつもなく長い間維持され、積み上げ続けられたような、慣れ切った強い意志を感じた。

どんな不自由に陥いろうと、自らの意志を護り通すことも、

最後に伝えたいことを相手に伝えることも、
それらはきっと、彼女の日常。
無根拠に、エリザベートはそんなことをふと思う。
いや、まるで難破船をサルベージするかのように、元あった語彙が概念を伝えて来た。
「声が出せないんじゃなくて――自分の意志で出していない。きっと私に伝えたいことを伝えたら消えてしまうのね、こいつは。だから、今まで何も喋らないでいただけなんでしょう？」
回答する。マーリンは、彼にしては深く頷いて見せた。
「そう、私も同じ予想だ。魔術においては≫言語≪に近しいものほど記憶容量（メモリ）をたくさん使うんだろうね。姿形、動き、熱、固さ、嵩、柔らかさ、そして色彩……そういうものよりは遥かに多い。そしてどんな存在もそうしたものを消費しながら生きている。見た目や存在感を構成するものより≫言語≪に近い≫声≪を発露し、消費すると、彼女はたちまち消えてしまうんだろう」
そこで彼は一度短く咳払いをした。

「だから多分、その子に目的があるとしたら、エリザベート、きみに伝えたいことを伝えるために、その時を待っているだけなのではないか、と私も思っている」

流石に伝えたいことというのが何かまではわからないけどね、と彼は柔らかく微笑んだ。

そんなもの、自分にだってわからない。予想がつかない。そうエリザベートは思うも口にはしない。その予想がつくなら、初めからこんな苦労はしていない。予想がついたらこの場でバラしていたのか、この男はと、改めてその非人間さに驚いた。

ただ、ふと気づく。初めの少女への問いかけに対する答え——

——どこに行ったら良いのかもわからないんでしょう？

これに少女はノーと答えた。首を横に振った。

——なら、行くべきところに行ったらどうなの。道案内もいらないでしょう？

これにも彼女はノーと答えた。

それらが、矛盾のない回答だったことにようやく気づく。

初めから彼女は、自分の傍で何かを伝えるために待っていただけだったのだから。

エリザベートのそんな説明に、ネロは訊く。

「礼装を取り換えるとどうなる？」

二人は試しに礼装を交換してみた。しかし、エリザベートの視界から少女が消えることはなく、また、ネロの認識の中に彼女が現れることもなかった。マーリンは、

「礼装を初めにつけた時に入力が終わってしまったか……エリザベートにしか意味のない入力だったのかもしれない。まあ、私はあんまり魔術に明るくないから、予想でしかないのだけれどね」

「……会わねばならぬ相手な気がしたのだが。余も耄碌したか」

礼装を元に戻しながら、彼女は無念そうに頭垂れる。けれどまあよい、とすぐに顔を上げた。

「何せ今日は貴様の……いや、なんでもない。なんでもないぞ」

エリザベートは首を傾げる。しかしネロは、なんでもないからな！　と明らかに慌てた様子で念押しする。

「とにかく視えないので自分で視ることは諦めたが、エリザベートよ。後でその者の似顔絵を描くがよい」

「そこまでして視たいものなの？　なんというか……本当にただの地味な日系人

よ？」

「ね、ネタバレ禁止！　よくわからぬが、視なければならぬ。絶対に視る。そうしろという天啓がいま余に下っておる。絶対だからな！」

「良いけど、絵を描くものなんて私、持っていないけれど」

「画材ならば余のところにある！　カンバスも油絵具も消しパンも何もかもあるぞ！　なんならペンタブもある！」

「なっ……!?」

流石にちょっとときめいてしまう。

絵心なんてあったかしら？　とエリザベートは自分自身に疑問に感じたのもつかの間、

「ねえ、い、今から描きに行ってもいいかしら……？」

脊髄反射でそんな申し出をする。そんな彼女とは反対に、画題になるだろう少女はえっと顔を強張らせた。自分を置いてきぼりにして何かまずい談合が始まろうとしているのがわかる。何しろ時計は、もう夜の七時を回ろうとしていた。

しかし、

「良いぞ、構わぬ。何せ、いつそやつがいなくなってしまうかわからぬからな。善は急げだ、行くぞランサー！」

エリザベートはぱあっと顔を輝かせる。

連行決定の瞬間であった。

説得をするすべもない。少女は何もかも観念したのか、うなだれたまま手を引かれ、ネロの部屋に連れていかれることとあいなった。

第2話

斜めに脚を閉じ、椅子に腰かけた、栗色の髪をした紺色のセーラー服の少女。
その傍らで不敵に微笑む、金色の髪を纏めた、肩章の豪奢な紅の衣装の少女。
ネロの部屋で、カンバスの前に座りそんなモデル二人と向き合う。エリザベートはずるいじゃないの、と抗議した。
「後で私も写真、撮って欲しいんですけど」
「馬鹿者、貴様にしか視えぬのに、写真も何もあるものか」
「えっ、ああ……そうだったわね」
絵を描けることで頭がいっぱいになっていて、当初の目的を忘れてしまっていた。
改めて二人の立ち姿を見る。それで気づいた。ずるいと抗議したのは、別に自分もそうして並びたかったからではなかった。いや並んでもみたかったが、それ以前に。

（似合い過ぎ、なのよね）

服飾から人種からちぐはぐだと言っていい。けれどこの二人の似合い方はどこから来るものなのか。

多分、少女がどう見ても、他人に手を差し伸べる善人の類だとわかるからだ。言葉を発せないとはいえ、馬鹿騒ぎしながらあちこちを周る自分とネロに、反発心一つ見せずに素直についてきたことだけとってもそれはわかる。機械性、自動性を一度は疑ったけれど、偶に見返してくるその瞳には、明確な意志が宿っていた。

無辜の人々から抜き出したような謙虚な善人。

剣を携えた正統な英霊。

助けられ、助け返す者同士として、それはこれ以上ない組合せに思えた。

歪な自分があそこに立ってもああは行かない。一見、同じ少女同士として見目は良くなるかもしれない。笑顔をつくって対外的に仲良く見せることは出来るかもしれない。けれど、中身が正反対を向いているのだ。いつかきっと破綻する。善人の彼女がこちらを助けようとしてくれるだけその幸せの足かせになる。

そんな所まで考えてしまっていた。

考え過ぎだ、とにわかに自分に呆れる。大切な人相手ならともかく、昨日今日会って何も知らない相手と自分との組み合わせでそう考えてしまうのは流石に病的に過ぎる、心が弱すぎるというものだ。

でも、大切な人ってなんだったかしら……と彼女は先刻と同じ疑問を感じた。

「描き始めるけど。あんまり、動かないでちょうだいね」

「……。いや、ランサー」

「何よ」

「余は外れよう」

「え？」

どうして？　とエリザベートはネロに問う。先ほど少しごねてしまったのがまずかったか。

しかしネロはネロで、ううん、と唸った。

「上手く説明できぬ。ただこの絵、余にとっても貴様にとっても大事なものになる気がするのだ。ならば、余はそこに入らぬ方が良い」

未だ真っ白なカンバスを指し示すネロ。

やはりというべきか言いたいことが伝わって来ず、エリザベートは首を傾げる。
「運命論かしら。嫌いのような、好きのような……だけれど、アナタはそれでいいの？」
「うーーーん……、良い！　構わぬ！」
「入りたいんじゃないの」
「良いったら良いのだ」
「まあ、どっちでも良いのだけど。ただ、アナタの胸や瞳を描けないのはちょっと残念ね」
エリザベートを素直な感想を述べただけだったが、ネロは顔を赤くして馬鹿者、と呟いた。
「ま、まあ、近い内にまた絵描き道具を貸してやる。その時に存分に描くが良い」
そうして結局、エリザベートは少女一人のエスキースを描きを始めた。
絵具を置くところまで行くのだろうか、果たしてこれが完成するまで彼女はここにいるのだろうか。
ふと、描き始めてからそんな事が気になってしまう。そのくらいのノープラン。

けれど明確な期限というものは特になく、ネロに彼女の姿形が伝わりさえすればそれで良いのだから、気負うのはやめようと考えた。

何から手をつけたらいいのかと、五分も悩んでしまった。結局アウトラインを描かないと始まらない気がし、髪と、輪郭と、目鼻口耳を置くところを柔らかい線でなんとなく決めていく。それから肩の山をざっくりと描いていく。

すっすっと鉛筆の芯がすり減っていく音だけがずっとしていた。髪に取り掛かった頃、エリザベートはネロに退屈じゃないのかと問いかけたが、彼女は良い、と短く答えただけだった。どうも、少女の形が鉛筆描きで露わになっていく様子にじっと目を凝らしているらしく、そこから彼女は、心地よい程度ではあるが僅かだけプレッシャーを感じるようになった。

確か、陰影の一番強い所は髪に隠れた額だ、鼻筋だ、と彼女は何処かで聞いた覚えがあった。まだ瞳に色を入れないまま、現実の光を無視しないようにそこにオーバー気味に陰影をつけておく。それから、輪郭の端には反射で黒く影を落とさないように。ここまで描き込む必要はない気もするが。

「なかなかどうして、上手いではないか。上手い気がするぞ？」

ネロの賞賛に対し、エリザベートは照れ隠しに、アナタに褒められてもと悪態をつきそうになるが、それをすんでの所で飲み込む。描き途中の絵を自分で貶めるのは、やってはならない事のような気がした。

「そんなことないわ。写実的に、できるだけ、やっているだけよ。本当はもっと自由な感じにしたいのに」

「おお、つまりそれは、余にわかるように努力してくれているということか？」

ネロは嬉しそうに微笑む。

「――……」

言われ、苦々しい感情と恥ずかしさがないまぜになる。馬鹿じゃないのと返すことも出来ず、鉛筆を動かすことに集中する。

黙々と影をつけていく。ただ一応、絵具を載せる後のことは考えて薄めに。目的が完全に変わってしまったな、と思う。

（だいたい、この絵が大切になるなんてセイバーが言うから……）

そんなことを言われては、適当に終わらせたり芸術性に走ることなどできない。面白くもつまらなくもない、という気持ちがとてもする。自分ではない他人のた

めという要素が加わったからかもしれない、不思議な感覚だった。
やがて瞳のところに鉛筆を走らせる。肌の影付けが終わった訳ではないが、まっさらなここにも少し影を置いてみようと思った。
否応なしにエリザベートと少女の目と目が合うようになる。
少しだけ、少女の頬が赤らんだのがわかった。それでもモデルに徹してくれているのか、表情は少しも動かない。
エリザベートはいつの間にか、彼女の感情を読み取ろう、読み取ろうとしていた。もう少し表情豊かだっていいのに、どうしてそこまで強情なのだとまで思った。別に、モデルになってもらうのにはちょうどいい筈なのに、逆のことを考えていた。
それでも右目を描き続ける。これで手法として正しいのかはよくわからないけれど。
と、急に、
「――あ」
視界が滲む。
さっきからおかしいとは思っていた。

ずっと妙な苛立ちがあった。彼女の表情を見ながら、もう少し笑っていて欲しいと思っていた。けれどそれが何故必要なのかわからず口にも出来なかった。自分の眼から涙が零れた時、やっぱりかとまでエリザベートは思った。

鉛筆を持つ手が止まる。描くことを続けた方が良いのか、やめておいた方が良いのかわからない。涙が出るのはわかっていたが、その後どうしたら上手く行くかまでなど考えていなかった。手元が狂う。鉛筆が落ちて芯が折れた。その後ろにおり、エリザベートの表情が視えないネロは驚いて落ちた鉛筆に目を見張った。

そうやって、続いていた集中の糸がふっと切れる。同時に、脳が閉じ切っていた四方のシャッターを開くように感情というものを復帰させてくる。エリザベートの涙はそれで、ぽろぽろと止まらなくなった。

「どうして……」

言いながら、そんな筈がないと弁明するための作り笑いすら起こらない。ロボットのように自動的に泣いてしまうと、こんな反応が起こるものなのかと、彼女は自分のことを不思議に思う。

ネロはその様子を無表情に黙って、少しの間だけ眺めていた。

「良い」

ただやがて、そう一言だけ言い、泣き崩れるでもなく、椅子の上で人形のように涙をこぼすエリザベートを抱き寄せた。

◆

マーリンは、カルデアの中でも特に人気のない、今は照明を落とされた辺鄙な区画の廊下を歩いていた。

その先は袋小路で、消火栓が設置されているだけだ。真っ暗な中に異星の生物の単眼じみた赤い光が点いているだけ。用事のある施設がある訳ではない。誰かの部屋がある訳でもない。あるいはその壁の向こうが、何処か異界に通じているのではないかと思えるくらいに何もない、ただの行き止まり。

サーヴァントであれ職員であれ、誰もこんな所には訪れない。現在視の千里眼を持つ彼でもそこを探してあてるのに少し苦労したほどだ。よほど今そこにいることを知られたくないのだなあ、と苦笑混じりに彼は思う。

ここはもう電子の海ではない。だから彼女は、世界を大きく書きかえることはおろか、ここにかの木造校舎を再現するなんてことは難しいのだろうな、と思いを馳

せた。

「ねえ、BB君、で良かったよね。君の名前」

行き止まりの壁に背を預け、立っていたのは一人の黒衣の少女だった。彼女は藤色の髪と紅いリボンを揺らし、花の魔術師の方を振り向いた。胡散臭く微笑みながら返す。

「グランドキャスターさんじゃないですか。どうも初めまして。ご苦労様です、こんな隅っこの誰も来ない所まで」

「初めまして。ご苦労様は、ぼくの言いたかったことなんだけどね。――セラフィックスではありがとう、立香くんたちを助けてくれて」

「はあ？　セラフィックスって何のことですか？　こちらの世界の新素材か何かですか？」

マーリンは嬉しそうに微笑む。

「素材なんかじゃない、文脈でわかるだろう？　場所のことだよ。でもいいさ、お礼は言えたからね」

「で、貴方、何の用ですか？　私、これでも忙しいので、見たい番組（チャンネル）を見るのと、

貴方みたいな人の相手とを同時にすると、胡散臭すぎてハングしてしまいそうなんですけど」

「わかった。手短に済ませよう。……君と私の共有しているこの現在は、何月何日だったかな」

「それ、ぜんぜん手短に終わるくだりじゃないじゃないですか」

「どうも、カレンダーを見るクセがなくってね。なに、教えてもらえればすぐ終わることだよ」

「五月一七日ですよ。それがどうかしたんですか？　二一時六分をBBちゃんがお伝えします、なんて館内放送でも流しましょうか？」

手短にしたいと言った割にしらを切るな、とマーリンは思う。どうも、『放送』を視ることよりも、自分に真実を伝えないという項目の方が彼女の中で優先度が高いようだ。とぼけるという行為は虚偽申告にあたらないのだろうか。それとも自分は夢魔との混血だから、人間には嘘をつかないというルールの対象外なのか。

長居してはいけないなと彼は思う。しかし、それは特段自分の身が危ういからではなく、BB自身の行っているらしいことを邪魔してはならないだろうという気遣

いからだったが。

本来彼女の目的など暴き立てるものはないのかもしれないと思ったが、まあ、七割方割れているのだから本人の口から訊いても同じことだ、と彼はいかにも非人間の言い訳らしいことを考える。

「そうだな、ううん……例の君がなかったことにした一件のことで、君が協力的なことは私はあんまり疑っていない。今気になっていのは、その、エリザベート君に見えている『誰か』は本物なんだろうか？　ということなんだ」

しかしBBは飽きれたようにかぶりを振った。ああ、だめですだめだめ、と教鞭をくるくる回す。

「その言葉はよろしくないです。何故って私、観念論をぶつつもりはないんですよねえ。だってそれって、この世で一番くだらないことですもんね。無限に時間があれば、ランダムにタイプするタイプライターでも宇宙一の名作小説が書けるのと同じ類のことですよ？」

「言い方を変えよう。それはオリジナルから派生したものなのかな。それとも、全ての想定をきみがやったの？」

「それにはお答えできます。二つの要素が合わさったものです。オリジナルの『彼女』の願望と、足らない部分をエリザさんの眠っている記憶で補填したものです」
「なるほどね。それを、あの礼装をすり替えることでやった、という訳だ。はは、ほんとに反則じゃないか君は」
「笑うところですか？　それ」
「いや、気に障ったのなら謝ろう」
「非人間設定とかはもういいんですよねえ。だって人間にだってごまんといます、それくらい共感能力のない破綻した方なんて」
BBは言いつつ楽しそうに微笑む。
「まったくその通りだね。さて、ということは、その『オリジナルの誰か』に頼まれて君はその手伝いをしたということなのかな」
「それは違います。単なる私一人の判断です」
マーリンの眼差しがほんの少しだけ細くなる。笑みが消える。それは、彼にとって想定外の答えだった。
「では……なぜ？　そして、どうやって？」

「……」

「BBくん？」

しばらくの間があった。やがて自分の顎に手をやっていたのをふとやめ、彼女は再び話し出す。

「私は、ひとまずこのカルデアで自らの安全性を証明したい。そのために、触れられたくもない個人的な思惑を開示するのも構いません。ただし、『彼／彼女』の存在を明かさないことを、それより上位の優先度に位置づけています」

「私がその、『彼／彼女』の存在を誰にも口外しなければ良いのかな」

「そうです。ここまで干渉しておいてやはり広めるなというのも、矛盾しているのかもしれませんが」

「それに従わないとどうなる？」

「それを気にする意味はあまりありません。多用したくありませんが、なかったことにするだけですから。いや、貴方との場合直接的に戦うしかないのでしょうか？」

貴方はどうも、例外的に、私の事象改竄を免れるルートを持っているようですし。

――妖精郷ってなんというか、忌々しいですけど万能ですよね」

「なるほどね。じゃあ、言わないよ。ぼくも、一度彩られた紋様をいつの間にか描き変えられるのは、面白い理由がない限り好きじゃないからね」
「では、私は貴方を信用します」
「わかった」
私の扱う能力は、貴方たちの言葉でいうところの虚数魔術です。
そんな語り出しで彼女は話し始めた。
「虚数空間に存在するものなら取り出すことが出来る。そういう領域に、『彼(彼女』のちっぽけな願望がまだ残っていたのです。やり残したことの類、とでも言いましょうか。ああすれば良かった、あのとき誰それにこんな声をかけてやれば良かった、もしもそんなことがあったなら……。そういうものです。虚数空間というのは悪性情報の廃棄場ですから、そういったあるいは後ろ向きな思い残しが、本人の電脳体に置いてきぼりにされるケースがあるのです。
その『思い残し』を持ってきて、いちばん要素の似通った≫Ａｎｏｔｈｅｒ Ｅｎｄｉｎｇ(もう一つの結末)≪の概念礼装に込め、エリザさんの認識を介して『彼(彼女』を再生させてみた……ということです。私には今、貴方と会話するのと同時に、礼装を通してエリザさんの

見ているものが見えています」

「……」

マーリンの、最初から感じていた疑問がここに来て明確なものになる。

色々と訊きたいことは他にもある。ただ、必ずその説明だけが避けられようとしている感じがした。それがあるいは彼女の秘密なのかもしれないと彼は考える。それをこそ収集したい彼は改めて訊く。

「機序はおおよそわかったよ。ただ、君は……そんなことを、一体何のためにやっているんだい？」

「……それは」

「エリザ君のためにやっているのではないことはわかる。それは、五月一七日という時間で彼女が適していただけのことだ。それはわかるけれど、こんなことをして君自身に一体何のメリットがある？」

「それは、『彼女』が、私に縁故のある人間だから、では答えになりませんか？　それ以上の説明が必要ですか？」

「できれば。けれど、うん……今更だけど、君の辛そうな顔を見ていたらやめてお

けば良かったと思い始めている私もいる」

「本当にもう、遅いですね。貴方はもう訊いてしまった。訊かれてしまった以上答えなければなりません」

彼女はそこで一度言葉を切る。瞳を閉じる。それから、改めて歌うように話し出した。

「それは、私が、何万年が過ぎたと感じていても、想いに蓋をしようとしていても、『彼/彼女』にまた会いたいと思っているからです。そしてそれは、この戦いのために召喚されて記憶を座に調整されたエリザさんも、セイバーさんも、きっと忘れてしまっても同じことを思っているんです」

どこか諦めたような、慈悲深いような微笑みを浮かべるBB。

その笑顔を見たマーリンは、どうしてかは全くわからないが――身を裂くほどの後悔を感じた。

「――最後まで尋ねてごめん」

でも、教えてくれてありがとう、と彼なりに心の底からの感謝を表する。

なんていじらしいのだろうと思う。

これが恋というものの一端なのだと、非人間たる彼にもわかった。

これはBBの『彼/彼女』に対する恋心だ。おそらくは、きっと。

自分自身を見てくれなくても構わない。

動いて、まばたきをして、時々微笑んで、仮初に再現され、いつか消えるだけのものとしてでも、やり残した望みを叶えてくれさえすればそれで良いと。

この甘ったるくてまるで報われない、真っ暗闇の中で揺蕩う、マゼンタのともしびみたいなものがそうなのだと。

何故か、一瞬だけ、マーリンはBBのことを抱きしめたいとまで思った。けれどそんな権利は勿論、自分などにはない。恋というものを目の当たりにし、ますますそんなことを彼は強く思った。自分のこの衝動が、そこまでの熱量をもったものではないと、反証的に理解をした。

BBはしかし、はあ、と芝居がかった仕草に戻り、いかにもな溜息をついてみせる。

「通りすがりのこんなよくわからない人にこんなことまで喋ってしまうなんて、割と屈辱です。今度ここまでの無配慮な踏み込みがあった時には……貴方の大好きな人理の紋様も、めちゃめちゃにしちゃいますから、そのつもりでいてくださいね」

◆

ネロの部屋でのスケッチを終えた後、彼女に送られてエリザベートと少女は部屋に帰った。

涙はとっくの昔に止まっていた。おさまる時はあっけないもので、枯れるや否や、椅子から立ち上がった彼女はもう今日は帰るわ、とネロに告げた。

扉のコンソールに触れて鍵を開け――る必要がなかった。初めからロックが外れていた。首を捻りながらもドアをスライドさせる。すると、部屋の明かりがつくのと同時に、パンパンとけたたましく何かの弾ける音が連続した。三人は反射的に耳を塞ぐ。淡く火薬の匂いが感じられるようになった頃、エリザベートは驚いて瞑っていた瞳を片方だけ開く。

「えっ……なになに、何なの。もしかして爆破テロ!?」

「このお馬鹿トカゲ」

そんなものが起きてたら火薬くさいで済む訳がありませんでしょう……と開いたクラッカー片手に呆れかえっているのは、清姫だった。それから、彼女の反対側、壁の陰から出て来たのは彼女らのマスターの立香。

そんなワケで、と非常に軽い感じに、髪のシュシュを弾ませて彼女は切り出す。

「お昼の後からずーーーーっと待ってた甲斐があったあった！　いやほんとは待ちくたびれて、流石に途中は退散していたけれども……ともかく！」

エリちゃん、ランサー、エリザベート、と彼女の呼び名がそれぞれ続いた後――誕生日おめでとう、と三人の声が重なった。

当の本人は呆気に取られ、目を真ん丸くした。

ちょっと本気で何を言われているのかわからない。

ほとんど放心状態になって茫然と自分の部屋の中を見回す。すると、あちこちに可愛らしい飾りつけがしてあるのが見て取れた。折り紙のチェーン、小さなぬいぐるみ、パステルカラーの風船。壁に、棚の上にと所狭しと配されていた。

すっかり自分の知っている部屋の様子ではなくなっている。そんな様子を見上げて改めて唖然としていると、

「ご、ごめんね……驚かせようと思って……ダ・ヴィンチちゃんに鍵借りて、勝手に入っちゃって。家具とか小物にはなんにも！　なんにも触ってない！　んだ、けど……」

立香の弁明が耳に入っているのかいないのか、未だぼんやりとしたままエリザベートはネロに訊く。

「……。セイバーは、知ってたの？」

「うん？　知ってても何も、この飾りつけは余も手伝ったのだぞ。大変だったのだからな！」

「……」

「本当は昼過ぎに貴様を迎える予定だったのだ。それが、いつまで経っても現れぬものだから一度部屋に戻ったら、当の貴様が清姫と余の所に現れて……何があったのかと思ったぞ」

結局そのお陰でマスターと念話してタイミングを図れたのだがな、とネロは笑う。

「だから言ったでしょう、何か大切なことをお忘れではないかって」

清姫は変わらず残念なものを見る目でエリザベートを見やる。

それを聞いた立香はえっと声を上げた。

「清姫、まさかバラしそうになってたの？」

「だってわたくし、ますたぁに引っ張って来られただけですし？　自分でこのドラ

娘のお祝いがしたいと思った訳ではありませんし？　むしろこの娘がますたぁにお祝いされるのを見ていると……こう、遣り切れない想いが募るとでも申しましょうか」

「そ、そっかあ……五月一七日ってしっかり覚えてたから、てっきりお祝いしたいのかと……」

「……常日頃から物覚えが良いだけです」

扇子で口元を隠し、ついと向こうを向く彼女。

（お祝い……）

立香の言葉を反芻して思い出す。

自分は、催し物が大好きだと思う。

コンサートを開くのも、ハロウィンを告げるのも——誰かをちっぽけな食事会に招くことも。随分、楽しかった。貴族の役目だ、という責任感を捨て去っても、それは間違いなく楽しい思い出だった。

華やかなことが好きだ。面倒なこまごまとした作業に追われることもあった気がする。けれど、誰かに見てもらえるとそれだけで心が踊った。ここにいるという実

感が沸く気がした。

――いや、やっぱり色んなひとに途方もない迷惑をかけて来た気がするけれど。

ただ、そんなやっかみを抜きにしても……自分がお祝いされる時のことなんて、考えていたようで、望んでいたようで、実際に起きたらどうなるかの想定が甘過ぎて、実感というものが沸かなかった。

貰うべくして貰う贈り物とか。

別の目的のついでに送られる賛美とか。

そんな、老獪と思惑に台無しにされたかわいそうなプレゼントは、何処かで山ほど受け取って来たように思う。

だから、こんな風に真正面から来られると、どんな顔をして良いのか全然わからなかった。

いや、その前に――自分はどうしようもない罪人なのに、と。

そんな自分が、生まれてきた日を祝福してもらえることなどあって良いのだろうか、と思っていた。

立香も、ネロも……清姫すら、自分があまりにノーリアクションだったからか、

何処か心配そうに見ている。心配されていると今ならわかる。けれど、違うのだ。嫌なのではない。ただ、本当に、自分が罪人であるということが心に蓋をしているだけ。どんな顔で嬉しがったら良いのか、経験がなくて何もわからないだけ。

助けを求めるように、自分にしか見えない、栗色の髪の少女の方を振り向く。

何かが言ってもらえると思った訳ではなかった。けれど彼女は、エリザベートと目が合うと、これ以上ないというくらいに、それまでに見たこともないくらいに、嬉しそうに微笑んだ。

「良かったね」

エリザベートは翡翠色の瞳を見開く。

薄暗い世界がまばゆく照らし出された気がした。

けれど、それは錯覚だ。

自分は一体何を言われたのだろうと、何処かに向かって問いかけたくなるほどの。

それから、そんな声をしていたんだ、聞いた覚えがある、と彼女は思考を連続させる。

おかしい。何処で聴いたんだろう。

――良かったね。

けれど、その言葉の意味に、声に、ひどく心が安らいだ。

それだけで、細かい事情を考えるのをやめることが出来た。

しばらく、彼女は本当に長い間黙っていた。だが、やがて、

「ええ」

立派に笑顔を返すことが出来たと思う。

……沢山、許されないことをしてきた。

何も知らぬまま数えきれない人をこの手にかけてきた。

だから、自分を怨むひとたちからすれば、こんな結末は絶対にありえないと言うだろう。

けれどもし、それを全部知った上で、こんな風に赦してくれる人たちがいてくれるのなら、

その人たちの前でだけは、明るい私（アイドル）でいなくっちゃ――。

そう、彼女は思った。

「あいつらには、会って行かないの」

訊くが、少女はゆるゆると首を振る。その身体の輪郭は、水に溶けていくかのように少しずつ滲み始めていた。

また、いつかどこかで会えるから、と少女は言う。

「――いや、会って行きなさいよ。あいつらは私なんかより、ずっとずっとアナタのこと、待っているんだから！」

「〝なんか〟じゃない」

でも、わたしは貴女の中のわたしでしかないから、と少女は言う。

「そんなこと……もう、わかっているけど」

「顔上げて、エリザ」

俯きかけた彼女が顔を上げる。すると、少女……岸波白野は少しだけ、すまなさそうに微笑んだ。

小さな両手が差し出される。

エリザベートはその差し出された手のひらをしばらくじっと見ていた。けれどやがて、自分の両手をそこにそっと重ねる。

そして祈るように目を閉じた。

少しでも長くこの彼女と一緒にいようと思ったら、もう言葉を交わさない方が良いと思った。声を紡ぐたび、少女の姿が崩れていくのがわかったから。

その代わり、目を瞑ったまま心の中で、言いたかったことのすべてを言う。こんな方法でも伝わるという確信があった。

十分に言いたいことをぶちまけてから、エリザベートはゆっくりと目を開く。

すると、手の暖かさはそのままに、少女はもうそこにはいなかった。

両手を通して自分の中に仕舞い込んでしまったかのたよう。

痕跡の一片も跡形なく、消え去っていた。

重ねていた手をおそるおそる裏返す。

意味もなく、エリザベートは、何もない自分の手の中をじっと見つめる。

それから、仕方なさそうに少しだけ微笑んだ。

「――いっちゃった」

やがて、何がいっちゃったの……？　と、おそるおそる訊いてきたのは、立香だった。

ネロと清姫はエリザベートの顔を静かに見つめたまま黙っている。

彼女は立香の顔を見、なんでもないというように首を振った。それから、短く呟く。

「ありがと」

「え？」

「お祝い！　してくれてありがとうって言ったのよ！　他になんと聞こえて？」

エリザベートは立ち上がり、ネロと目線を交わす。

彼女は少しだけ寂しげに頭を垂れていた。けれど、エリザベートが片手を差し出すと、にわかに顔を上げてくれた。

「踊るか、ランサー」

「ええ」

飾りつけを踏みつけないようにしながら、二人は即興で、音楽すらかけ忘れたまま踊りだす。

いや、それぞれ勝手に好きな曲を心の中で流してはいたが、結局、疲れて止めるまで二人の足並みが乱れることはなかった。

やがて二人して、飾りつけのパステルカラーの風船の海に倒れ込む。その勢いが

あまりにも良く、ぱあんと音をたてていくつかが割れてしまったが、当の二人は、音にひとしきり驚いてから、悪戯の結果を見た子供のようにくすくすと笑い合った。
呼吸が苦しい。しかも、笑ってしまってそこに追いうちがかかっていた。
けれど、エリザベートはその言葉を口にする。
ありがとう、子リスたち。

ネロの部屋に残された、モデルのいなくなった絵はその後ずっと絵具も置かれず、左目が描き込まれることもなかった。
ただ、それでも部屋の主の意向で大切にとっておかれ、偶に、幾人かのサーヴァントが見に訪れるようになったという。

マゼンタのともしび

著者　さろめ

発行日　2019 年 7 月 26 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/123773/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。